

『新刊全相平話武王伐紂書』における

地理・地名について

菅原 尚樹

はじめに

小論は『新刊全相平話武王伐紂書』（以下『武王伐紂書』と略称）における地理・地名について、方位詞と地名との関係およびその地名が実在するかどうか等を検討することを通して、該書の地理認識がいかなるものであったかを論じようとするものである。

「全相平話」中の地理について論及したものとしては、『至治新刊全相平話三国志』（以下『三国志平話』と略称）および『新編五代史平話』（以下『五代史平話』と略称）の地理認識を考証した、中鉢雅量氏の「宋金説話の地域性―『五代史』、『説三分』語りを中心として―」がある。また、寧希元氏、卿三祥氏には『三国志平話』の地理について考察した論考がある。さらに、中川諭氏は、『三国志平話』と『三分事略』を比較検討し、そのテキスト成立の先後関係を明らかに

にせんとする過程において、『三国志平話』の地名・地理についても触れている。「全相平話」は『武王伐紂書』・『新刊全相平話楽毅図斉七国春秋後集』・『新刊全相平話秦併六国』・『新刊全相平話前漢書続集』・『三国志平話』の五作品が残っているが、右に見るように、『三国志平話』を除く四作品については、管見の限り、その地理認識を主として論じたものはない。もちろん「全相平話」全体を通じ、もっぱらその地理認識を論じたものもまた、管見の限り見当たらない。

上に挙げた諸論考について紹介すると、中川論文は『三国志平話』の地理認識を明らかにすることを主眼としていない。したがって、論中において詳細な地理の考証がなされているわけではない。寧論文は『三国志平話』の地理を検証した結果、金代の地名が多く用いられていることから、成書年代が金代であったろうと結論づける。卿論文は寧論文に反駁を加えた一篇であり、成書年代を金代に比定するのは正しくないとする。寧・卿両氏の論考はともに、『三国志平話』中の地理について、ある程度くわしく論じているが、それでもなお考察の対象となっていない地理・地名は少なくない。またそもそも、ある時代の地理・地名が多く用いられているからといって、成書年代を単純にその時代に比定することは軽率の誹りを免れないであろう。なぜならば、書物の来歴を古く見せるために、古い地名はもとより、古い官職名や制度名が用い

られることが容易に想定されるからである。したがって、ここにある時代の地理が色濃く反映されているということは言えるにせよ、成書年代まで比定することは軽々に行うべきではない。

『三国志平話』および『五代史平話』の地理を考証している中鉢論文にあつても、その主旨は両平話が物語られた地域性を明らかにする点にある。中鉢氏は『東京夢華録』巻五「京瓦伎芸」に「説三分、五代史」が記されていることから説き起こし、『三国志平話』および『五代史平話』の地理は北方がもつとも正確であることを実証し、それは両平話が「説三分、五代史」の語りを受け継いでいるからではないかと、結論づける。すなわち、中鉢論文は、両平話が語られた背景をさぐる手段として、その地理を考証しているのだと言える。

中鉢論文には、地名が事細かに検証されている部分ももちろん存在している。しかしそれ以上に、中鉢氏はもっぱらある州とある州の位置関係の妥当性を検証することを通して、両書の地理認識を明らかにしようとしている。この中鉢氏の方法は、けだし有効な手段であると思われる。「全相平話」に散見する地名は、その存在自体が定かではないものが多いことも見られる。一方、州名は、その変遷の跡をトレースすることが困難ではないため、ある州がいつの時代から用いられた名称であるのかを特定することは、さほど難しいことでは

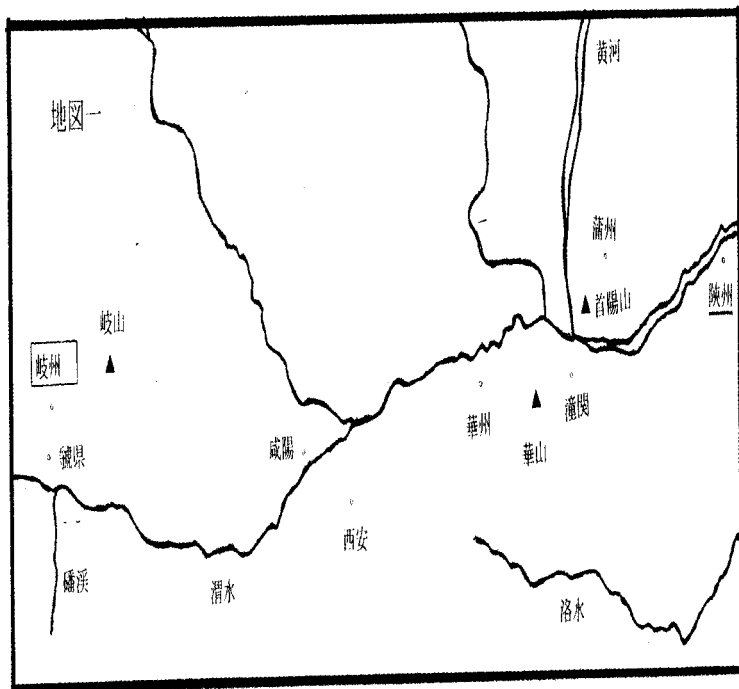
ないからである。また「全相平話」には、誤字あるいは脱字が多い。物語中に数多く登場する地名のなかにも、誤字や脱字のあるものは当然存在している可能性がある。したがって、「全相平話」における地理・地名の考証は、なかなか容易ではないのであるが、地名のなかでも州名だけは、用いられる数に限りがある。それゆえ物語の叙述に即して判断すれば、誤字あるいは脱字があつたとしても、ある程度その名を特定することができるのである。

「州」の名称ないし位置を中心として検討を加えた中鉢論文が、『三国志平話』および『五代史平話』の地理認識をある程度明らかにし得た理由はここにある。しかし一方で、「全相平話」に数多く登場する地名のなかには、その地理認識の誤りゆえに、かえって各書の特徴を浮かび上がらせる端緒となりうるものも含まれているように思われる。また地名の来历を知ることを通して、平話成立の可能性をもつ年代を推察する手がかりを得ることもあると思われるのである。

このような関心から、筆者は「全相平話」における地理認識の考証を行わんとする次第である。さきに述べたとおり、小論ではまず『武王伐紂書』の地理認識について検証を行う。小論には、論に関係する地理・地名を記した簡単な地図を附した。合わせて参照されたい。なお該書の地理・地名についてはできる限り調べたが、筆者の調査不足ゆえに未詳のもの

のも残されており、それらについては他日を期すことを、あらかじめご寛恕願いたい。

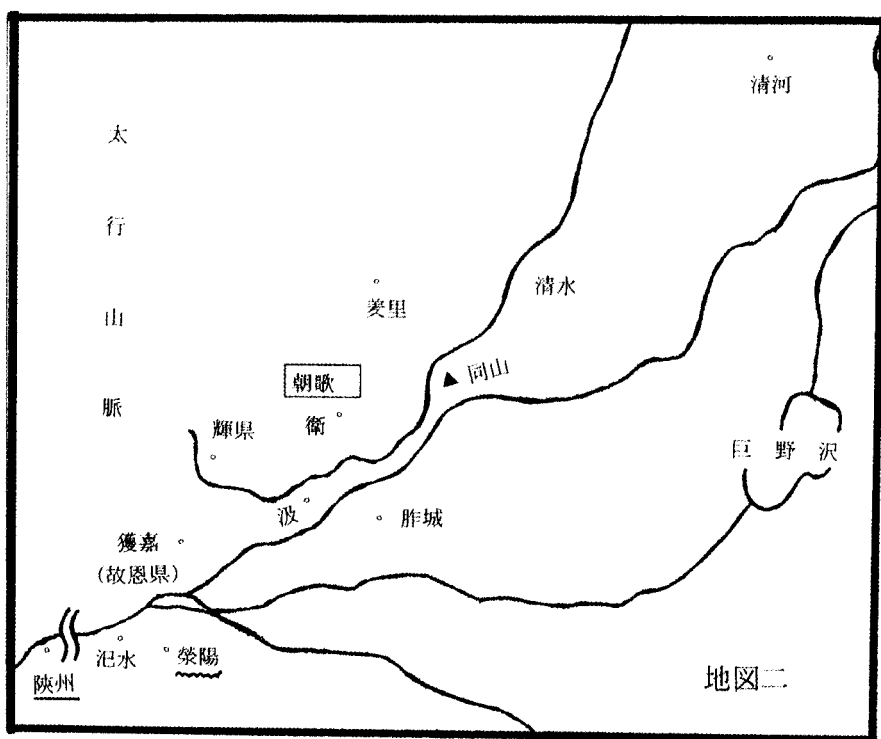
一、『武王伐紂書』における方位詞と地理の関係について



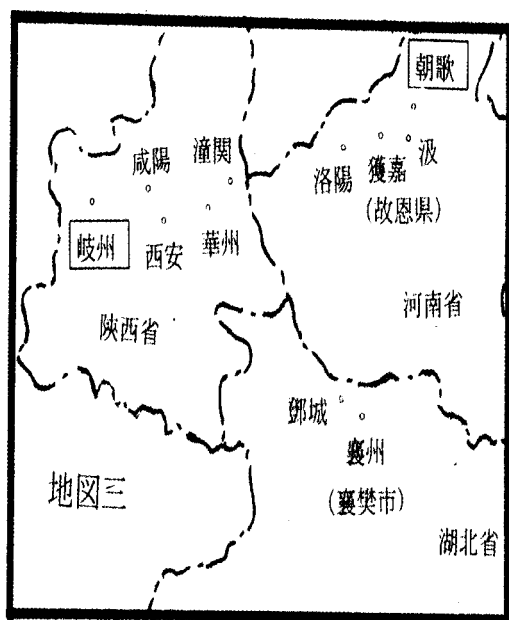
『武王伐紂書』は、その題名が示すとおり、「武王が紂王を伐つ」物語である。物語では、紂王とその寵姫である妲己、武王とその父姫昌、姫昌と武王に仕える姜尚、および紂王の嗣子殷交が主要人物として登場する。このことから、紂王ら中心人物の行動、あるいは彼らにかかわる叙述とともに、物語内の地理が動くであろうことが推察される。

『武王伐紂書』のなかでまず目に付く地名は、華州の「潼関」である（地図一参照）。潼関は国境付近にあるため（現在でいう陝西省と河南省の省境にある）、紂王のいる朝歌（河南）と姫昌のいる岐州（陝西）を物語中の登場人物が移動するに際して（地図三参照）、頻繁に登場する。とはいえ、西方から朝歌へ移動する際に、つねに潼関を経由するわけではない。『武王伐紂書』巻上、華州太守の蘇護が娘の妲己を連れて朝歌に至る場面には、蘇護が潼関を経由したとの叙述はない。蘇護が經由するのは「故恩県」である。故恩県は、種々調査してみたものの、なおその存在が確認できない地名のひとつである。ただし、故恩県に対しては、注釈と引き「今獲嘉是也」の語句が、『武王伐紂書』本文中に小字によって附されている。したがって、この小字注から故恩県の位置をある程度推定することはできる（地図二参照）。「故恩県」が「獲嘉」であると想定し、蘇護らの行程を改めてたどって

みると、蘇護は華州から東進して故恩県（獲嘉）に至り、そこから北東へ進んで朝歌に到着したことになる（地図一・二



蘇護は朝歌を目指して東進したが、紂王の太子である殷交は、朝歌から出奔した。殷交が身を落着けたときは、「華山」である（地図一・二参照）。華山は蘇護が太守を務める華州にあるから、蘇護とは逆に、殷交が朝歌より西へ向かったことがわかる。もっとも当該場面では、殷交の移動行程そのものより、文中に用いられる方位詞の使われ方が特徴的であると考えられる。それは殷交が出奔する直前、比干との商議



参照）。この蘇護らの行程は無理のないものである。

を終えた場面において、「出西門」という語が三度使用されているのである。³「西」という方位詞を含む「出西門」は、殷交が「門」から逃げることにともに、殷交が「西」へ向かうことをも強調しているかのようである。

こうした方位詞の特徴的な使用は、武王の父である姫昌が紂王の振る舞いを目にし、紂王を諫めるために朝歌に向かうことを決める場面においても見られる。当該場面では、姫昌が自ら二度「帝に会うため東して朝歌に行くのだ（東去朝歌見帝去也）」と述べる。くわえて地の文においても「姫昌は言い終えると、旅路について東へと向かった（姫昌道了、上路東行）」と叙述される。殷交出奔の場面では「出西門」が用いられているのにすぎないのに対して、姫昌は自らが二度「帝に会うため東して朝歌に行くのだ」と述べている。殷交の西進とは対照的に、姫昌については、自らの意志によって東へ進むことが強く打ち出された叙述がなされていると考えられる。

上述した殷交および姫昌と同様、『武王伐紂書』巻中、紂王に仕える姜尚が紂王のもとから逃げ出す場面においても、方位詞が数度用いられている。姜尚の足取りをまとめると以下のとおりである（地図一・二参照）。

姜尚は、黄飛虎を故意に逃したかどで、紂王のもとを追われる。姜尚は朝歌から故恩州（獲嘉）まで逃げ、そこ

から西南へ進路を取る。黄河を渡り潼関を経た姜尚は、華州の山にたどり着く。そこからさらに、岐州の南四十里、號県の南十里を経て、姜尚は最終的に礪溪へと至り、漁翁となる。

姜尚の足取りは地理・地名の位置関係から見ても、無理のないものである。当該場面における方位詞を見ると、飛廉と費孟が姜尚を追趕して「姜尚が西南へ向かったと知るものがあり、二将はそれを聞くと、兵を率い急いで姜尚を追った（有人知姜尚西南而去、二将聞之、督兵急趕姜尚）」とあるほか、姜尚が高遜の手を借りて黄河を渡る場面にも「二人は別れると、姜尚は西へ向かった（二人相別、姜尚往西而去）」とある。さらには姜尚が「岐州」から「礪溪」に至る行程においても、「紂王は自ら天下を乱した。当時姜尚は西のかた岐州の南四十里の地、號県の南十里、渭水の河岸にある礪溪にやってきた（紂王自乱天下。當日姜尚西走至岐州南四十里地、號縣南十里、有渭水河岸有礪溪之水）」と叙述される。姜尚の移動に際しては、「西」ないし「西南」といった方位詞がついてまわるのである。

姜尚が礪溪に身を隠したのち、姫昌は夢を見る。『武王伐紂書』巻中は、姫昌がその夢のなかにおいて、南方にいる賢人を探しに行くよう啓示を受けたところで終わる。続く巻下は、姫昌が姜尚を迎えに行く場面から始まる。そこで姫昌は、

「岐州」から南進すること四十里、まず「號渠」に至り、ついで「磻溪」にたどり着くという行程をたどる（地図一参照）。この行程は、さきに挙げた姜尚が岐州を経て磻溪に身を隠すまでのそれと、ほぼ同様である。したがって、姫昌の足取りにも地理的な問題は無いと言える。

以上、本節に挙げた地理・地名については、その位置関係に誤りはなく、なおかつ方位詞との関係から見ても、齟齬のないものであった。注目されるのは、殷交と姜尚の逃亡の場面、また姫昌が朝歌に乗り込もうとする場面において、方位詞がかさねて用いられていることである。天下の王たる紂王とその寵姫の妲己が、天下の中心である朝歌にほぼ腰を落ち着けているのに対し、紂王を諫めんとする姫昌以下、姜尚・殷交といった物語の主要人物たちの行動が、物語の場面場面を、西へ、東へと動かしているのである。

二、『武王伐紂書』における方位詞の誤用と地名に関する考察

前節に見てきた部分では、『武王伐紂書』の地理にかかわる叙述に齟齬は見られなかった。それでは該書において、地理に関する誤りは皆無なのであろうか。結論をさきに述べる

見た方位詞が誤用されることによって、地理の位置関係に矛盾が生じる結果を引き起こしているのである。

方位詞の誤用例として、まず『武王伐紂書』巻中、姫昌が拘留先の姜里から岐州へ帰国しようとする場面を挙げる事ができる。当該場面の叙述はやや長いため、要約をもって示すと以下のとおりである（地図一・二・三参照）。

紂王を諫めるために朝歌に赴いた姫昌は、姜里に拘留される。それから七年間の拘留を経て、姫昌は姜里から解放されて岐州に戻れることとなる。姫昌は姜里から西北へ進路を取り、西のかた朝歌に向かう途中、汲城の西まで来たところで殷の将と一戦交える。そこに殷交らが現れ、殷の将を斥ける。姫昌らは西北の鄧城にたどり着く。

ここでもまた殷の将と小競り合いが起こり、今度は雷震子が現れる。殷交や雷震子が殷の将を追い返したのち、姫昌は岐州にたどり着く。

姫昌の出発地点となっている「姜里」は、『史記』巻三・殷本紀にすでに記載があり、姫昌が拘留された場所として知られる（地図二参照）。姫昌が姜里からたどり着く「汲城」は、汲県の治所を指す地名であろう。『魏書』巻一〇六・地形志二上・司州「汲郡」に記される六つの領県のひとつに「汲県」があり、その注に、「汲、二漢は河内に属し、晋は属す。後魏。太和十二年復し、汲城を治とす。比干墓・太公廟・陳城

有り（汲、二漢屬河内、晉屬。後罷。太和十二年復、治汲城。有比干墓・太公廟・陳城）」とある。汲郡が領する県には、前節に触れた「獲嘉」や「朝歌」といった河南の地名が含まれていることから、汲城も美里同様に今の河南省の地名であったと言える（地図二参照）。「鄧城」については、たとえば『旧唐書』卷三九・地理志二・山南道・山南東道「襄州」に「鄧城、漢の鄧県、南陽郡に属し、古の樊城なり。宋の故の安養県なり。天宝元年、改めて臨漢県と為す。貞元二十一年、県を古の鄧城の置に移し、乃ち臨漢を改めて鄧城県と為す（鄧城、漢鄧縣、屬南陽郡、古樊城也。宋故安養縣。天寶元年、改爲臨漢縣。貞元二十一年、移縣古鄧城置、乃改臨漢爲鄧城縣）」とある。『旧唐書』のいう「古の樊城」とは、今の湖北省襄樊市に相当するであろうか（地図三参照）。こうしてみると、美里・汲県・鄧城のいずれも、実在した地名としておいてよさそうである。

ただし、その地名の位置関係を見た場合、姫昌の行程には首をかしげざるを得ない。まずは、美里から汲城に至る行程である。原文に「姫昌は（費孟ら）三人と別れ、収監の苦しみから逃れることができる」と、馬に跨り進んだ。姫昌は西のかた朝歌付近までやってきて、汲城の西にたどり着いた（姫昌辭了三人、得脱囚牢之苦、姫昌上馬便去。……姫昌西走近朝歌、前到汲城西）」とある。この行程に疑問を感じるのは、

前掲した地図二に見えるように、美里は朝歌の北にあり、汲県は朝歌の南に位置するからである。美里から南の朝歌へ向かうために、わざわざ朝歌よりも南にある汲県を経由するのは、不自然ではないか。

汲県から鄧城へと至る行程にも、同じく疑問を感じる。姫昌が汲城にたどり着いたとする、さきの叙述に続き、姫昌らが殷の将と一戦交える。その後、原文に「殷交は靈胡蒿と姫昌を守って進むこととした……それから西北の鄧城にたどり着くと、姫昌は靈胡蒿に「おぬしはどうして私を助けに来たのだ」と尋ねた（有殷交共靈胡蒿護姫昌而去……只到西北鄧城、姫昌問靈胡蒿、尔因何來救我）」とあるように、姫昌は「西北の鄧城」に至ったことになっている。しかし、前掲した地図三に示したとおり、鄧城は、朝歌や汲城のはるか南、今の湖北省に位置しており、汲城の「西北」ではない。汲県から鄧城へ至るためには、ほぼ南進する必要がある。

その後、なおも姫昌を追撃する殷の将を、殷交や雷震子の協力によつて払いのけ、姫昌は「進むこと十日となり、岐州にほど近いところまでたどり着くと、武王が臣下たちとともに姫昌を迎えにやってきており、姫昌に謁見した（行至十日、前至岐州至近、武王共百官接着姫昌、皆參拜）」とあるとおり、岐州にたどり着く。しかし、地図三に示したとおり、汲県から見て岐州はほぼ真西に位置している。つまり、当該場

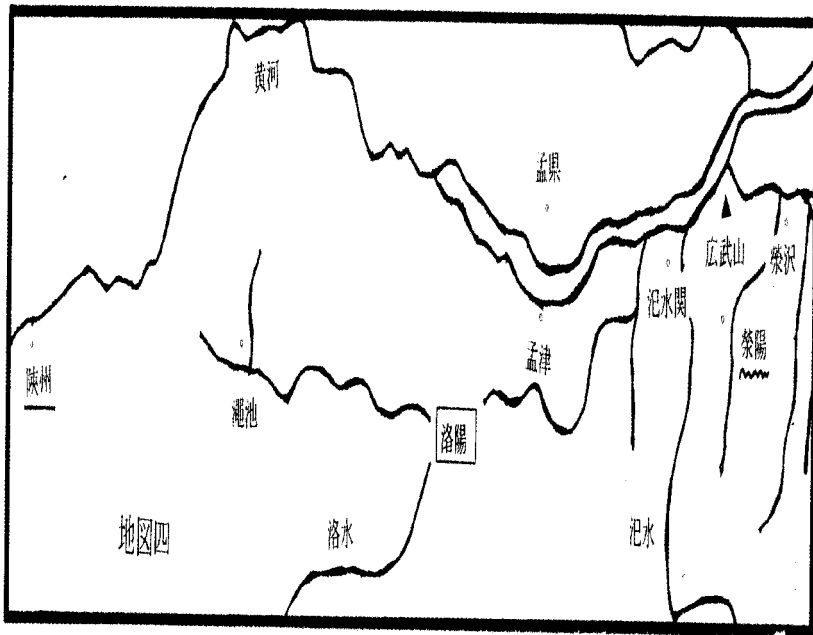
面の叙述をそのまま受け取ると、姫昌は岐州に帰るために、わざわざ回り道をして鄧城を経由した格好になるのである。ちなみに、かりに「鄧」が「鄭」の誤りであったと仮定すると、鄭州ないし鄭県は汲県に比較的近い場所にあるため、鄭州を経由して岐州に向う行程には、さほど違和感を憶えない。しかしながら、「鄧」が「鄭」の誤りであると断定することは今のところできない。ここはひとまず、原文に即し、「鄧城」を経由したこととしておく。

これら地理上の位置関係とともに問題となるのが、当該場面に用いられている方位詞である。本文に「姫昌は西北のとりでに向かつてわき道をたどり日夜休むことなく進み：：姫昌は西のかた朝歌附近まで向かい、汲城の西へやってきた：（姫昌望西北寒山偷路日夜而走不止：：姫昌西走近朝歌、前到汲城西：：）」とある。つまり、姫昌は姜里から西北ないし西へ向おうとしたのである。結果として、『武王伐紂書』の姫昌は朝歌に近づいたことになっている。しかし、実際の位置関係から見ると、朝歌は姜里から見てほぼ西南に位置する（地図二参照）。姜里から西進して朝歌に着くわけではない。これらのことから、当該場面では、地理上の位置関係がだいぶ粗雑に叙述されていると言わざるを得ないのである。

方位詞と地名間の齟齬は、『武王伐紂書』巻下・十葉裏にも見られる。武王が伐紂の兵を挙げ、朝歌を包囲する場面であ

る（地図一・二・四参照）。

武王傳聖旨、教團朝歌城、於四下用兵、下三十六寨。唯



有朝歌守關紂兵背紂者不少、順周者極多。當年戊午日、四方兵將、尽至孟津、八伯諸侯、不會而自詣。咸皆來朝武王、詣於武王前、咸山呼万歳、賀万千之喜。武王見天下衆諸侯咸詣、心皆喜順。武王設宴、管待衆諸侯及衆將軍士。筵宴畢、下令教兵將尽圍定朝歌。擊城兵士、東下至同山百路、西下至太行山、南下至遂村、北下至清河。

(武王は命を伝え、朝歌城を包囲させ、四方に兵士を用いて、三十六のとりでを設けさせた。朝歌の関所を守る紂王の兵士で紂王に背く者は少なくなく、周に帰順する者は非常に多かつた。その年の戊午の日、四方の兵將たちは、すべて孟津に至り、八伯諸侯は、会盟なくとも自らやってきた。すべてみな武王に謁見するためやって来たのであり、武王の御前まで来ると、王の長寿を称え、祝いを述べた。武王は天下の諸侯たちがみなやって来たのを見て、すっかり喜んで言祝ぎを受けた。武王は宴席を設け、諸侯および將軍たちをもてなした。宴席がはねると、下知して兵將に朝歌をすっかり包囲させることとした。城を撃つ兵士は、東は同山百路まで至り、西は太行山まで至り、南は遂村まで至り、北は清河まで至った。)武王は東は「同山」、西は「太行山」、南は「遂村」、北は「清河」というように、広範圍に兵を派兵し、朝歌包圍網を敷かせたのである。当該場面の地名について、近年刊行された史

為樂主編『中国歴史地名大辞典』(中国社会科学出版社、二〇〇五年。以下『辞典』と略称)を基に、朝歌を中心として派兵された各地名、および朝歌から見た方位を調べると、まず「同山」は今の河南省の山であるとされる。『読史方輿紀要』卷十六「濬県」の条に「同山、県の西南四十五里にあり。相伝うらく武王紂を伐ちしとき、諸侯ここに会同す、因りて名づく、と(同山、縣西南四十五里。相傳武王伐紂、諸侯會同於此、因名)」とあることから、同山は武王伐紂故事に深くかわる地名であつたことがうかがわれる。同山と朝歌の位置關係を見てみると、同山は朝歌から見てほぼ東に位置する(地図二参照)。したがって、「東は同山百路まで至り」とする叙述は正確であると言ふことができる。

それでは同じ山でも、「西」の「太行山」はどうであろうか。「太行山」は、今の河南・山西・河北三省にまたがる山である(地図二参照)。また「太行山」が広範圍に連なる山脈であることから、朝歌から見て「西は太行山まで至り」とする叙述は、だいたい合っていると見えよう。

次に朝歌の「南」にあるとされる「遂村」と、「北」にあるとされる「清河」について確認してみたい。まず「遂村」であるが、『辞典』による限り、「遂〇県」といった地名はいくつか確認できるものの、まったく同名の地名は採られていない。また管見の限り、『武王伐紂書』が刊行される以前の

資料より、「遂村」なる村を見つけることはできなかった。したがって、「遂村」に関しては今のところ未詳である。「清河」については、鍾兆華氏が「清水を指すにちがいない」と指摘する^三。一方、県名としての「清河」も存在し、たとえば『旧唐書』卷三九・地理志二・河北道「貝州」に「貝州、隋は清河郡と爲す。武徳四年、竇建徳を平らげ、貝州を置き、清河・武城・漳南・歷亭・清陽・鄆・夏津七県を領せしむ。六年、治所を歷亭に移す（貝州、隋爲清河郡。武徳四年、平竇建徳、置貝州、領清河・武城・漳南・歷亭・清陽・鄆・夏津七縣。六年、移治所於歷亭）」とある。すなわち、清河県は今の河北省にあった地名となる。さきに挙げた「同山」と「太行山」がともに「山」であつたことから、南の「遂村」に合わせ、北の「清河」もあるいは「清河県」を示していると考えられなくもないが、「清河」とあるだけでは河川名か県名かの判断はつきかねる。ひとまずは鍾氏の述べるところに従い、河川の「清河」を指していると仮定して調べると、清水は汲県の北を流れる河川である^四。（地図二参照）。前節に触れたとおり、汲県は朝歌の南にある。つまり、清水も朝歌の南を流れる河川となる。そうであるとなると、「北は清河まで至つた」とする叙述は、不適當である。ちなみに「清河」が「清河県」を指していると仮定するならば、『武王伐紂書』の叙述は正しくなる。

さて、姜里から姫昌が岐州に帰国するまでの場面において、方位詞の誤用がみられることは、本節冒頭にすでに触れた。そこでは方位詞のみならず、姫昌が經由する地理の位置関係にも違和感を覚えることを述べた。それら粗雑な叙述がなされているのは、おもに河南における地理についてであつた。河南の地理が粗雑に叙述されていることは、武王が伐紂の兵を起こし、岐州から孟津に至るまでの叙述からも読み取れる。当該場面のあらすじを、地理叙述を中心にまとめてみよう（地図一・四参照）。

武王軍は岐州から潼関に進軍する。潼関での戦闘において、姜尚は千里眼らを捕縛し、彼らを陝府の処刑場に護送させる。ついで武王軍は、澠池を經由し、洛陽に至る。その間武王は、諫言するために現れた伯夷叔斉を、首陽山の下へ送る。姜尚は兵を率いて洛陽から汜水関へ至り、汜水関の南にある広武山において敵を破り、黄河を渡る。武王軍が孟水を過ぎたところで、殷の軍勢は故恩州西陵において軍営を設ける。武王軍のもとへ、黄飛虎が援軍にやつて来る。武王軍は孟津に至る。

武王軍が岐州を発ち、潼関を經由して「澠池」から「洛陽」へと至るまでの行程についてはなんら問題がなく、洛陽から「広武山」に至るまでの行程も、ほぼ問題はない。それでは、当該場面に見える地名についてはどうであろうか。

千里眼らを押送した「陝府」は、たとえば『元史』卷五九・地理志二・河南府路に「陝州、唐の初めは陝州と為し、又た陝府に改め、又た陝郡に改む。宋は保義軍と為す。元は仍りて陝州と為す（陝州、唐初爲陝州、又改陝府、又改陝郡。宋爲保義軍。元仍爲陝州）」とある¹¹⁰。陝州は『魏書』卷一〇六・地形志二下「陝州」を見ると、澠池郡などを領する今の河南省にあつた¹¹¹。そうしてみると、千里眼らが押送された処刑場は、河南にあつたことになる。

黄飛虎に関しては、『武王伐紂書』卷中において、妻を紂王および妲己に殺されたことを知り、黄飛虎が兵を率いて朝歌へ至る場面がある。その際、黄飛虎がいたのが胙城県である。上に挙げた、武王軍の援軍にはせ参じた際にも、胙城県から出立したのであろう。胙城県から故恩州（獲嘉）に至ることは、無理な行程ではない（地図二参照）。

ついで、「広武山」と「汜水関」について見てみよう。広武山は、たとえば宋の歐陽忞撰『輿地広記』¹¹²卷九・京西北路・鄭州「滎陽県」に「……隋の開皇四年 広武県を置き、仁寿元年 名を滎沢と更め、滎陽郡に属せしむ。唐は鄭州に属す。広武山有り……（……隋開皇四年置廣武縣、仁壽元年更名滎澤、屬滎陽郡。唐屬鄭州。有廣武山……）」とある。「汜水関」は『資治通鑑』卷二八一・後晋紀二・天福二年に引く胡三省の注に「汜水関は県を以て関に名づく、即ち虎牢関なり（汜

水關以縣名關、即虎牢關也）」とある¹¹³。広武山があつた鄭州、汜水関が置かれた汜水県ともに、河南に属す地名である¹¹⁴。ところが、この汜水関と広武山の位置関係がおかしいのである。というのも、広武山はそもそも汜水関の南ではなく東北に位置する山だからである（地図四参照）。したがって、「汜水関の南 広武山」という『武王伐紂書』の叙述は誤りとなる。

さらに、『武王伐紂書』で、武王は「広武山」を経たうえで、黄河を渡り「孟水」を過ぎてゐる。原文に次のようにある。

却説紂王今知西伯侯兵來過黄河、來時用司戸參軍為將、紂王冷笑微微、此人年邁、不足為患乎。前時賈仲去探潼関、敗了回來見紂王、且說太公之事、紂王不信。今過孟水、紂王令文武評議之事。文武蒙宣、咸詣殿下、山呼畢。紂王問曰、寡人知周起兵、將過孟水。今問卿等、您誰敢去為將、捉太公收西周武王。若得勝回來、寡人也不負卿等之力。（さて紂王は今や西伯侯の兵が黄河を渡つてやつて来ており、そこで司戸參軍を將としてゐることを知ると、かすかに冷笑した。「かの者は年を取つており、氣にするには及ばぬ」。以前に賈仲が潼関を探りに行き、敗れて紂王に復命した際に、太公望姜尚のことを述べたが、紂王は信じようとしなかった。いま孟水を渡

ろうとしているので、紂王は文武百官に評議するよう下知した。文武百官は宣下を承け、殿下にやつてくると、言祝ぎを述べ終えた。紂王は次のように尋ねた。「わたしは周が兵を起こし、孟水を渡ろうとしているのを知った。貴殿らに尋ねる、将となり、太公望と西周の武王をとらえるものはおらぬか。勝利して戻ったあかつきには、わたしとて貴殿らのはたらきに背かぬぞ。」

ここから、武王軍が黄河を渡り、ついで孟水を渡ろうとしていることが確認できる。

「孟水」は、鍾氏によると「孟津河」であるとする²²。孟津河は黄河流域の孟県附近の河であつたようだ²³（地図四参照）。そうすると、武王軍は黄河を渡つたうえ、さらに孟津河を渡つたことになる。つまり当該場面において、武王軍は「広武山―黄河―孟水―孟津」と經由したことになるのであるが、地図四に見るとおり、武王軍は、広武山での戦闘のち、孟津河のあつた広武山の西の孟県付近まで、後戻りしたことになる。紂王を伐たんと東の朝歌に向かつている途中に、一度来た路をわざわざ引き返すこの行程は、いささか不自然ではなからうか。

不自然な行程と言えば、武王軍は黄飛虎と合流したのち、故恩州から孟津に至り、そこで諸侯と会することになる。しかし故恩州が前節に触れた獲嘉であるとすれば²⁴、それはむ

しろ朝歌に近い東方にあるから（地図三・四参照）、故恩州から孟津に至るにも、これまで東進してきた道を、逆に西に戻る必要が生じる。これもやはりおかしい。こうしてみると、当該場面の河南の地理に関しては、『武王伐紂書』の叙述は相当に粗略であると言わざるを得ないのである。

『武王伐紂平話』の地名にあつて、もつとも問題となるのが「故恩州西陵底」であると思われる。原文に「（費仲の言葉を聞き）紂王は「貴殿の言う通りにいたそう」と、崇侯虎を大将に任命して、兵百万を率いて西周を攻めとらせることとし、（崇侯虎は）行軍すること数日にして、故恩州西陵底にやつてきてとりでを設け……（紂王依卿所奏。拜起崇侯虎為大将、領兵百万来收西周、在路行經数日、前到故恩州西陵底下了寨……）」とある。したがって、「西陵底」は紂王がいる朝歌と武王軍が駐屯する孟水の間に位置する地名であることは、察しがつく。しかし、故恩州以下の「西陵底」について調べると、「西陵」なる地名は、『辞典』に数力所採られているが、故恩州―すなわち前節に触れた小字注から言えば獲嘉―と位置的に合致する「西陵」は存在しない。また「西陵底」という地名は『辞典』には採られていない。そうしてみると、「西陵底」には誤字あるいは脱字があつて、元來別の地名を指している可能性もある。「西陵底」の語構成について、「西陵」と「底」を切り離して解釈するのがもつと

も自然ではあるが、その場合「底」をどう処理するのが問題となる。また西陵底を地名として見なければ、「西の山のふもと」と訳すことは可能かもしれない。しかし、「陵」を「山」、「底」を「ふもと」の意味で用いる例が、『武王伐紂書』のなかに見当たらない。したがって、「西陵底」の訳として、「西の山のふもと」はだいぶ無理があるように見受けられる。いずれにしても、「西陵底」の三文字については未詳である。

以上、本節では、地理・地名間に見られる位置的な矛盾や、地理と方位詞とに齟齬が見られる場面について見てきた。姫昌らの行動とともに物語の場面が移る際に、方位詞と地理が関連して叙述されることは、前節と同様である。しかし、その地理叙述および方位詞の使用には、いささか首をかしげざるを得ない部分がいくつも見られることが確認された。なかでも河南の地理については、『武王伐紂書』の叙述は粗雑であることが浮き彫りとなったと言えよう。

おわりに

以上、小論では『武王伐紂平話』に散見する地名について、それらが方位詞とともに叙述された場合、それら地名の地理的位置関係に整合性があるかどうかを検証してきた。検証の

結果、第二節で見たとおり、姜里から姫昌が帰国する場面、武王軍が洛陽付近で戦闘を行う場面といった河南における地理に関して、方位詞と地名との位置関係との間に矛盾が生じていることが明らかになった。また、朝歌から四方に兵を派遣する際にもこれと同様に、方位詞に誤りが見られることもわかった。これらのことから、『武王伐紂書』における河南の地理的描写は、かなり粗雑に叙述されていると言えることができる。

さらに、書中に出現する地名が実際に存在したものであるかどうかの検証についても、当初予想していたことではあるが、その存在を確認できない地名がいくつも見られた。そのような地名のなかには、あるいは同音に由来する誤字によって記されているものがある可能性もある。また、第二節に触れた「孟水」のように、『武王伐紂書』の作者はそれを「孟河」の意味で用いていたという可能性もある。小論で十分に検証できなかった、存在を確認できない地名については、今後とも鋭意、その検証につとめたいと思う。

河南の地名叙述が粗雑である一方、『武王伐紂書』には、おおまかな地理的位置は合っている地名が少なからず存在することも確認された。小論の第一節に示したとおりである。また地名ではないが、紂王と妲己の宴楽の場として『武王伐紂書』の巻中・一葉に登場する「西鹿台」という台の存在す

る位置についても、その地理認識は正しいものであると考えられる。卷中の「西鹿台」が登場する場面では、まず

當日紂王共妲己遊西鹿臺、前有一河、號曰野水河。妲己共紂王登臺上而坐、望見河岸上冬月浚水、二人欲下水。

有一年少者怕冷、不敢下水、数次上岸。老者不怕冷而撩衣便過。（當時紂王は妲己と西鹿台に遊んだおり、台の前に河があり、野水河と言った。妲己は紂王と台に登って座ると、河のほとりは十一月の寒さで氷が張っていたのだが、二人の者が水に入ろうとしているのを見た。ひとりは若者で寒さを恐れ、水のなかに入れず、数度岸に上がった。年かさの者は水の冷たさを恐れず着物をからげて河を渡った。）

と、叙述される。

この老人と若者の行動の違いがどこにあるのか不思議に思った紂王は、妲己に理由を尋ねる。妲己はそのわけを「若者は髓が脛のなかにゆきわたっておらず、また陽の気が衰弱しているので寒さを恐れる。一方の年かさの者は、髓が脛中にいっぱい、陽の気が盛んであるから、寒さを恐れないのだ」と説明するのであるが、紂王に「どうしてわかるのだ（如何見得）」と言われる。そこで妲己は、二人の脛の違いを實際に見てみることを提案する。

紂王曰、依卿所奏。令左右提取二人来、断脛看之、果然

如此。紂王大喜、告妲己曰、卿煞知好事。如此損害人命、後來不敢来河上過往。紂王令左右去到処捉人、来於河中試之、每日害数十人命。（紂王は「そちの申すとおりにいたそう」と言った。そこで側近に命じて二人をつかまえてこさせ、脛を切り開いて見ると、妲己の言うとおりであった。紂王はたいそう喜び、妲己に「そちはなんとよいことを知っておるのだ」と告げた。このように人の命をそこなったことで、のちに河を渡って行こうとする者はなくなつた。紂王は側近に命じてここから人をつかまえてこさせて、河を渡らせてみては、毎日数十人の命をそこなつた。）

当該場面にある「西鹿台」については、『史記』卷三・殷本紀に引く裴駟の『集解』に「瓚曰く、鹿台とは、台の名、今朝歌城の中に在り（瓚曰、鹿臺、臺名、今在朝歌城中）」との記載があり、朝歌にあつたとされる²²⁰。『集解』の記載に拠る限り、「鹿台」とは『武王伐紂書』の「西鹿台」に相当するのであらうと推察される。該書の作り手は、「鹿台」のおおまかな位置を把握していたのであらう。

なお引用文に見える「断脛看髓」故事については、『武王伐紂書』において何度か触れられる。なかでも特徴的な叙述として、卷中・七葉裏に「紂王は（西の兵が姫昌を救いに来たことを）放っておき、毎日摘星楼で妲己と楽しみ、妲己の

言うことを聞き入れ、人の童男童女のすねを打ち髓を見ては、民の苦しみを考えようとしなかった。東鹿台は衛県の西北にあり水辺に臨み、西鹿台は朝歌の西北にあり山峰に臨んでいる（紂王不顧、毎日去摘星楼上共妲己取樂、信妲己之言、将人家童男童女敲脛看髓、不思民苦。東鹿臺在衛縣西北看水、西鹿臺在朝歌西北看山峰）とある。「東鹿台」があつたとされる「衛県」は、隋代に朝歌を改めて置かれた県であるとされる²⁵⁶。その位置から考えると、「東鹿台」も朝歌にあつたと言ふこともできよう。

注目すべきは、東鹿台・西鹿台の挿入箇所である。なぜならば文中の「東鹿台は衛県の西北にあり水辺に臨み、西鹿台は朝歌の西北にあり山峰に臨んでいる」は、文中に唐突に現れている印象を与えるからである。『武王伐紂書』の地名のなかには、たとえば「故恩縣、今獲嘉是也」のように、「今く是也」の形式により示される獲嘉のほかにも²⁵⁷、本文のなかに竄入した注釈ではないかと疑われる文が見られる²⁵⁸。「東鹿台は衛県の西北にあり水辺に臨み、西鹿台は朝歌の西北にあり山峰に臨んでいる」もあるいは注釈ではないかと疑われる。じじつ、この一文がなくとも文意は通じるであろう。しかし、注釈であるとして、何に対する注釈であるのか判然としないこともあり、軽々な判断は差し控えたい。

「はじめに」で紹介した中鉢論文は、州の位置関係を手が

かりに、『三国志平話』と『五代史平話』の地理認識を考察していた。それがある程度有効な手段であることについてはすでに述べた。一方、『武王伐紂書』にはその存在自体が判然としない州名が見られる。それは、比干が治めていたとされる「碩州」である²⁵⁹。該州については、筆者の調査による限り、その存在を確認できなかった。さらに州名について附言すると、第一節に挙げたように、『武王伐紂書』の巻上に「華州太守」の蘇護が登場しているほか、該書の冒頭で「八伯諸侯」が紹介される際には、彼らの名前とともに、以下のように統治する州の名が列挙されている。

紂王有八伯諸侯：第一東伯侯姜桓楚、坐青州。第二西伯侯姬昌、坐岐州。第三南伯侯楊越奇、坐荊州。第四北伯侯祁黃廣、坐幽州。第五東北伯侯楚天佑、坐揚州。第六西南伯侯霍仲言、坐許州。第七東南伯侯張方国、坐冀州。第八西北伯侯扈敬達、坐并州。此是八伯諸侯、尽是先君殿下忠臣。（紂王には八伯諸侯がいた：第一は東伯侯の姜桓楚であり、青州にいた。第二は西伯侯の姬昌であり、岐州にいた。第三は南伯侯の楊越奇であり、荊州にいた。第四は北伯侯の祁黃廣であり、幽州にいた。第五は東北伯侯の楚天佑であり、揚州にいた。第六は西南伯侯の霍仲言であり、許州にいた。第七は東南伯侯の張方国であり、冀州にいた。第八は西北伯侯の扈敬達であ

り、并州にいた。彼らが八伯諸侯であり、みな先君の忠臣であつた。』（『武王伐紂書』巻上・一葉裏）

これら州名のなかには、古くより用いられてきたものもあれば、時代がだいぶ降つてから用いられ始めたものもある。ただ、用いられ始めた年代が異なるだけで、いずれも実際に用いられていた州名ではある。

このようななかにあつて頤州は、その位置を特定することができない州名なのである。この点においては、第二節に触れた「故恩州」も同様である。『武王伐紂書』にはほかに、桀が都を置いたとする「蒲城州」なる州名が登場する³⁰。ただし、該州は『三国志平話』巻上・五葉裏く六葉表において、関羽の姓名が紹介される際に「さてとある人物、姓は関名は羽、字は雲長といい、平陽蒲州は解良の人である（話說一人、姓関名羽、字雲長、乃平陽蒲州解良人）」とある。ここから見て、『武王伐紂書』の「蒲州城」は、「蒲州」の誤りであろうと考えられる³¹。

以上見てきたように、『武王伐紂書』では河南の地理・地名についての叙述が粗略であつた。それでは他の平話の地理認識はどうであるのか、また五種の平話全体ではどうであるのかという点が当然問われねばならない。なおかつ「全相平話」全体の州名をまとめて検討すれば、各平話の州名間に見られる差異について、より明らかにできるであろう。それゆえ、

「全相平話」全体に見られる地理・地名を検討することを今後の課題としたいと思う。

『武王伐紂書』は、物語の最後に武王軍が朝歌を攻める場面が控えている。そこでは攻城戦が展開されるゆえに、おおきな地理の移動はなく、地名を登場させる必要もない。それにひき替え、進軍する武王軍に対し、それを阻止せんとする殷の軍勢がぶつかり合う場面では、武王軍の進軍する経路に従いつつ、地名を物語中に組み入れることとなる。はたして、武王軍と殷の軍勢が交戦する河南において、地理・地名が多用される。その結果、該書の作り手が河南の地理や地名に対して認識が不確かであることが暴露されることとなった。この点が、『武王伐紂書』における地理認識の特徴と見なしうるであろう。

注

*1 「宋金説話の地域性―「五代史」、「説三分」語りを中心として―」（愛知教育大学研究報告、一九九三年。のち『中国小説研究―水滸伝を中心として―』所収、汲古書院、一九九六年）。

*2 寧希元「『三国志平話』成書于金代考」（『文献』一九九一年第二期）、卿三祥「『三国志平話成書于金代考』質疑」（『文

献』一九九二年第二期。

*3 『三國志平話』と『三分事略』（『新潟大学教育人間学部紀要』第六卷第一号、二〇〇三年）。

*4 『武王伐紂書』の底本には、『全相平話五種』（文学古籍刊行社重印、一九五六年）所収のものを使用し、翻字・句読・翻訳には、陳翔華編校『元刻講史平話集』（北京図書館出版社、一九九九年）、鍾兆華著『元刊全相平話五種校注』（巴蜀書社、一九九〇年）を参照した。

*5 当該箇所は以下のとおりである。傍線は引用者が付した。以下も同じである。

（蘇護らは）約行數日、前到故恩縣。今獲嘉是也。至夜於館驛中安下了、有故恩州太守蘇顔、前來管待蘇護、邀入衙中置宴。（『武王伐紂書』卷上・三葉裏）

*6 当該場面は以下のとおりである。

至明日、太子共胡嵩二人去辞皇伯比干。辞了、二人使出西門、纔行之次、忽見費仲。太子共胡嵩齧齒、仗劍來殺費仲。費仲縱馬而走、不能殺之、只殺了僕人數个。二人走出西門去了。却說費仲荒來見帝、詣於殿下、山呼萬歲、大王禍事也。禍從何來。費仲曰、今有靈胡嵩共太子出西門而走。臣見二人、去趕、二人仗劍來殺臣。臣縱馬而走、遂殺了伴當數人。二人去之甚速。（『武王伐紂書』卷上・十五葉表）

*7 当該場面は以下のとおりである。

……西伯侯告衆臣曰、吾今東去朝歌見帝去也。吾聞紂王不設朝政、寵着妲己之言、自乱天下。吾若到朝歌、入内亦因命必諫……衆群臣王子皆應諾。西伯侯先去辞老母太任。西伯侯曰、上啓母親、如今兒子東去朝歌見帝去也。更後七年方可來也。我母保重歲寒、休憂兒子……姬昌道罷、別武王上路、有武王言曰、同隨大王去如何。枉帶累一切人、吾身自當。姬昌又告曰、您後七年至中秋、吾免囚牢、吾西歸也。那時文武您迎我来。姬昌道了、上路東行、文武西歸。（『武王伐紂書』卷中・二葉表裏）

*8 磻溪については、たとえば『史記』卷三二・齊太公世家に以下のようにある。（一）の部分には張守節の『正義』にあたる。『史記』の底本には百衲本を使用し、以下『史記』の引用は該書に拠る。

太公望呂尚者、東海上人……呂尚蓋嘗窮困、年老矣、以漁釣奸周西伯（正義……括地志云、茲泉水源出岐州岐山縣西南凡谷。呂氏春秋云、太公釣於茲泉、遇文王。酈元云……水次盤石釣處、即太公垂釣之所。其投竿跪餌、兩膝遺跡猶存、是磻溪之稱也。其水清冷神異、北流十二里注于渭）。

*9 『武王伐紂書』卷中・十三葉表において、姜尚は磻溪に釣り糸を垂れながら「姜尚自嘆曰、吾今鬢髮蒼蒼、未遇明主。

尚止北望岐州、想文王是仁德之君……」と歎く。傍線で示したとおり、姜尚は北の岐州を望んで文王を想う。つまり、姜尚がいる磻溪から姫昌がいる岐州は北に位置することとなる。したがって、姫昌が姜尚を訪ねて南進する叙述は、上記の引用文からも方向的に妥当であると言えるのである。

*10 当該箇所「（姫昌が紂王の振る舞いのため息をつく）崇侯虎知之、以告紂、紂囚西伯姜里」とある。

*11 『魏書』の引用は百衲本に拠る。以下に正史を引用する場合、底本は百衲本とする。なお前掲注4鍾氏校注書六五頁注（一一一）には「汲城、今河南省汲県」とある。

*12 前掲注4鍾氏校注書六五頁注（一一二）には「鄧城、故治在今河南省鄧城県東」とある。

*13 底本には顧祖禹著『讀史方輿紀要』（樂天出版社、民国六二年）を使用した。

*14 前掲注4鍾氏校注書九六頁注（一四四）には「清河、当指清水。鄧城、故治在今河南省鄧城県東」とある。

*15 前掲注4鍾氏校注書九六頁注（一四四）では『水経注』卷九「清水」の条を引き「又東過汲縣北」とする。

*16 鍾氏は未詳としながらも『宋史』「地理志」や『水経注』を引用する。しかし、陝府の位置を特定するに足る資料ではない。

*17 当該箇所「陝州領郡五縣十一、恒農郡……西恒農郡……澠池郡……」とある。

*18 『輿地広記』の底本には、李勇先・王小紅校注『輿地広記』（四川大学出版社、二〇〇三年）を使用した。以下『輿地広記』の引用は該書に拠る。

*19 当該箇所は以下のとおりである。（一）の部分が胡三省注である。『資治通鑑』の底本には中華書局本を使用した。以下『資治通鑑』の引用は該書に拠る。

丁未……詔張從賓發河南兵數千人擊范延光。延光使人誘從賓、從賓遂與之同反、殺皇子河陽節度使重信、使上將軍張繼祚知河陽留後……從賓又引兵入洛陽、殺皇子權東都留守重义、以東都副留守・都巡檢使張延播知河南府事、從軍……從賓引兵扼汜水關（汜水關以縣名關、即虎牢關也。詳見辯誤）、將逼汴州。

汜水関については『輿地広記』卷九・京西北路・滑州「汜水関」にも以下のようにある。

本東虢國、鄭滅之、爲制邑、所謂制巖邑、即此。有故虎牢城、周穆王獵於鄭圃、獲虎、命畜之、因名曰虎牢。二漢爲成皐縣、屬河南郡……隋開皇初曰鄭州、十八年改成皐縣曰汜水。大業初置虎牢都尉府、屬滎陽郡。唐屬鄭州、顯慶二年屬洛州。垂拱四年曰廣武、神龍元年復故、後屬孟州。有汜水關、皇朝大中祥符中改爲行慶關。

引用文から、汜水関は隋代には「滎陽郡」、唐代には「鄭州」という今の河南省の州郡に属していたことがわかる。

*20『旧唐書』卷三八・地理志一「河南道」参照。

*21前掲注4鍾氏校注書九四頁注（一一五）では『水経注』卷五河水注の『魏土地記』を引用し「冶坂城旧名漢祖渡、城險固、南臨孟津河」とする。

*22前掲注21『魏土地記』中に見える「漢祖渡」を『辞典』で調べると、「在今河南孟県西。為古黄河渡口之一」とある。

*23『武王伐紂書』卷中・十葉表に

有費孟来殺姜尚。姜尚先至客館。至夜大陰、走至客館、前到故恩州。今、加是也。姜尚向西方觀望、相真主言……とある。波線部については、前掲注五所掲「前到故恩縣。今獲嘉是也」とほぼ同様の字句が用いられている。このことから考えると、「今、加是也」は「今獲嘉是也」と同一の表現である可能性もなくはない。筆者のこの推測が正しいとすると、「故恩州」と「故恩県」は同一の地名を指している可能性がある。

*24当該箇所は以下のとおりである。（一）で示した部分が裴駰の『集解』にあたる。

帝紂資辨捷疾、聞見甚敏、材力過人、手格猛獸、知足以距諫、言足以飾非、矜人臣以能、高天下以聲、以爲皆出

己之下……厚賦稅以實鹿臺之錢（如淳曰、新序曰鹿臺、其大三里、高千尺。瓚曰、鹿臺、臺名、今在朝歌城中）、而盈鉅橋之粟……

*25『資治通鑑』卷二五八・唐紀七四に以下のようにある。（一）の部分には顔師古注にあたる。

龍紀元年……辛丑、汴將丁會、葛從周擊魏、渡河、取黎陽、臨河、龐師古、霍存下淇門、衛縣（衛、漢朝歌縣、紂所都朝歌城、在今縣西、隋大業二年、改曰衛縣、唐屬衛州）、朱全忠自以大軍繼之。

また『元史』卷五八・地理志一・衛輝路「淇州」の条に「唐宋金並爲衛縣之域曰鹿臺郷」とあり、衛県と鹿台との関係がうかがわせる。

*26「今、是也」形式を持つ一文が地理注であるか否かを検討するにあたっては、別稿を用意している。

*27武王は朝歌を包囲するために、四方に派兵する。この場面の叙述は以下のとおりである。

當年戊午日、四方兵將、尽至孟津、八伯諸侯、不會而自詣、咸皆来朝武王、詣於武王前、咸山呼万歳、賀万千之喜。武王見天下衆諸侯咸詣、心皆喜順。武王設宴、管待衆諸侯及衆將軍士。筵宴畢、下令教兵將尽圍定朝歌。擊城兵士、東下至同山百路、西下至太行山、南下至遂村、北下至清河。清河上、有石橋村、橋村北有東橋村、西橋村。

於衛縣西二里有照刑臺、南北河橋辺、便是紂王殿。紂妻妲己摘星樓、在深山内、磨石嶺北是也。紂王夏月天避暑安都村、北有白龍潭廟、後有山岩、名曰倉谷、此処藏粮、至今無數也。有太公克下戊午日甲子日、天降衝雷之声、恁可破紂也。〔『武王伐紂書』卷下・十葉裏〕

波線で示した部分が、注釈ではないかと推測される部分である。なぜならば、波線で示した文章がなく、「北下至清河」から「有太公克下戊午日甲子日」へと叙述が続いたとしても、話の展開上、なんら問題がないと思われるからである。もつとも波線部が注釈であるとした場合、何に対する注釈であるのか判然としないため、軽々な判断は差し控えたい。

*28 当該場面は以下のとおりである。

紂王大怒、令左右摔下皇伯比干、推在一壁。王問妲己曰、此人如何。妲己心中思惟道、比干坐碩州時、參廟殿神靈、須用三牲肉祭之。有比干來廟、見一穴、令人探之、見床上有一妖狐中坐。探之、却出說与比干相公。相公交用柴點火撞穴熏之、或去穴中鎮之、見妖狐上湧出去、自後生泉水。今在寒泉村北是也。妖狐西走、前到故恩州、至驛中見蘇護女子、吸了三魂七魄、變為妲己。〔『武王伐紂書』卷中・十二葉裏〕

*29 当該場面は以下のとおりである。

比干又奏曰、昔日夏禹王之後、生桀王、无道、建都在蒲城州安邑縣。不修国政、出敕令不交百姓種田養蚕、遞相保守、天下大乱。湯是桀王之臣、見此无道、共伊尹伐之。大王不信小臣之言、亦如桀王之過也。〔『武王伐紂書』卷中・十二葉表〕

*30 前掲注4 鍾氏校注書六九頁注（一八五）にすでに指摘がある。なお引用文中の「解良人」について、鍾氏は「解の平民」の意でとるが、中川論・二階堂善弘訳注『三国志平話』（コーエー、一九九九年）三六頁では「解良の出身」の意にとる。この点についてはくわしく考察すべきであるが、『三国志平話』の地名について考察することは、小論の目的ではないので、ここではひとまず、中川・二階堂訳注書の訳に従っておく。